

この素晴らしい世界に友人を！

きゅうじょう

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

とある男が友人と異世界で生活する話。

もし作者の考えたキャラがこのすば！の世界に行つたらどうなるのか？

これは投稿者の妄想から出来た話です w

目 次

プロローグ	1
ああ、駄女神さま	3
冒険者	5
初戦闘そして再開	5
新しい仲間・アーヴィングザード編	7
爆裂魔法の威力と代償	10
爆発音の後の帰り道	12
二人目の上級職	15
盗賊の少女	18
カズマの運そして変態クルセイダー	22
キヤベツ収穫クエスト！	25
スキルポイントの使い道	28
スキルの作り方	33
魔王軍幹部登場	37

プロローグ

気がつくと俺は神殿の様な場所にいた。

「風間颯さん。ようこそ死後の世界へ。私はあなたに新たな道を案内する女神、エリス。この世界でのあなたの人生は終わつたのです」

そう言われて自分がなぜ死んだかを思い出す。

死ぬ前に友達が死んでしまつた。そいつは学校に行かず引きこもりであつたがゲームの話しなどでよく一緒に遊んだりしていた。もちろん俺は学校に行つていたが。そいつがこの前ショック死で死んでしまい、次の日悲しみながら学校に行く際に車に轢かれてしまったのだ。

「どうか、俺も死んだんだな」

「はい。悲しい事ですが過ぎてしまつたことはどうしようもありません。そこであなたには二つの選択肢があります。一つは生まれ変わり新たな人生を歩む。もう一つは天国でお爺さんたちの様な生活をするというものですが…」

そこでエリスは一旦止めて新たな案を言つた。

「今ではもう一つ選択肢があります。そのもう一つと言うのはゲームの世界に転生することです」

「ゲームの世界に…転生ですか？」

俺はイマイチ飲み込めずに首を傾げた。

「はい。ゲームの世界には魔王がいます。その魔王達に殺された人は怖がりその世界での生まれ変わりを拒否してしまいます。なので今その世界での人口が減つて来ているのです。なら違う世界の人達をそのまま送つてしまおうと言う案が出ているのです。そして、その世界に転生する人は何か一つ、特殊能力や伝説級の武器などを差し上げているのです。…この世界で生まれ変わるか天国に行くか異世界へと飛ぶか、どうしますか？」

「異世界でお願ひします」

俺は即答した。

「では一つ持つて行くものを選んでください」

そういってエリスは特殊能力や武器などの名前が乗つた一覧をこちらに見せてきた。本格的なものからネタを入れた物まで様々な物があつた。俺は一つの能力で目が止まつた。

「じゃあ、この『ラーニング』でお願いします」

このラーニングとは他の人が使つた技を一瞬で覚えて自分の物にする事が出来る特殊能力。この能力で魔法なんかを使って見たいと言ふ訳だ。

「分かりました。風間颯さん。あなたをこれから異世界へと送ります。魔王討伐のための勇者候補の一人として。魔王を倒した暁には神々からの贈り物を授けましょう」

「贈り物ですか？」

「そう世界を救つた偉業に見合つた贈り物。……たとえどんな願いでも一つだけ叶えて差し上げましよう」

それは嬉しい。俺はとりあえず魔王を倒す事を考えなくてはならない誰よりも早く。まあ、今の所何も願いなんて無いのだか。

「さあ、勇者よ！願わくば、数多の勇者候補の中から、あなたが魔王を打ち倒す事を祈つています。……さあ、旅立ちなさい！」

そして俺は明るい光に包まれた。

ああ、駄女神さま

冒険者

「本当に異世界だ…」

俺の第一声はそれだつた。見たことも無い街ヨーロッパ辺りの様な作りだ。車なんて物は無い。周りには人が沢山いたがその中にエルフや獣人の様なやつもいた。

「とりあえず何したら良いんだ?」こう言う時はまずギルドかな

そいつて俺は道を尋ねながら酒場に向かつた。

「いらっしゃいませー。お仕事なら奥のカウンターへ、お食事なら空いてる席へどうぞー!」

ウエイトレスが愛想よく出迎えてくれる。俺は迷わず奥のカウンターへ行つた。

「すいません。冒険者になりたいですが…」

「そうですか。では登録手数料千エリスが必要になりますが大丈夫でしょうか?」

…手数料?

俺は冷や汗をかきながらポケットに手を入れた。中からはジャリジャリと金属がこする様な音がする。出して確認すると合計で三千エリスあつたので千エリスを出した。

「では冒険者の簡単な説明を…。冒険者とは街の外に生息するモンスター。人に害を与えるモノの討伐を請け負う人の事です。とはいえば基本は何でも屋みたいなものです。そして冒険者には各職業がござります」

ゲームで言うジョブやスタイルと言うやつだろう。受付の人気が免許証くらいの大きさのカードを差し出した。

「こちらにレベルと言う項目がございますね?ご存知の通り、この世

界のあらゆるものは、魂を体の内に秘めています。どの様な存在も生き物を食べたり殺したり。他の何かの生命活動にとどめを刺すことで、その存在の記憶の一部を吸収できます。通称、経験値、と呼ばれるものです。それらは目で見ることができませんが、

受付の人_がカードの一部を指差し、

「このカードを持つているとそれが表示される様になります。この経験値を貯めて行くとレベルが上がります。そしてレベルが上がるときルを覚えるためのポイントがもらえますので是非頑張つてレベル上げをしてくださいね」

説明が終わると受付の人は書類を出して來た。

「ではこちらの書類に身長、体重、年齢、身体的特徴等の記入を願います」

身長167cm体重58kg年齢16、黒髪に黒目：

「はい、ありがとうございます。ではこのカードに触れて下さい。それでステータスが分かるので、その数値に応じた職業を選んでください」

俺はカードに触れた。

「ありがとうございます。カザマハヤテさん、ですね。ええと普通の人よりかは優れていますね。敏捷性が凄く高いですね。ですがこれではギリギリ冒険者しか選べませんね」

「あはは。これから頑張りますよ。それに初期の職業つて言うのも悪くないでしようしね」

「レベルを上げると転職も可能なので頑張つてください」

受付の人は元々よかつた姿勢のまま笑顔を浮かべて

「冒険者ギルドへようこそ、カザマハヤテさん。スタッフ一同、今後の活躍を期待しています」

こうして俺は異世界で冒険者になつた。

初戦闘そして再開

俺は今バイトをしている。

なんでバイトをしているのかって？

装備を買うのに全く金が足りなかつたんだよ！と言ふわけで二週間ほどバイトをしていた。そろそろ金が溜まつて来たので次の日に装備を揃えて冒険者らしくモンスターを倒しに行くことに決めた。

俺は今モンスターを倒しに草原に来ている。この草原には他の冒険者もいた。だが一組の冒険者達がよくわからないことになつていた。まず女性が何かを力説していた。それは別に気にならないのだがそのすぐ後ろにジャイアントトード、所謂巨大なカエルが女性を食べられてしまつていて。今はカエルに食われた女性を少年が助けに行つていているところだ。

そして俺はその少年に見覚えがあつた。

その少年を確かめるために俺はその二人組の所へ向かつた。

「あの大丈夫ですか？」

取り敢えず俺は女性の心配をした。流石に巨大カエルに捕食されたらトラウマになるだろう。その女性は泣きじやくついていてまともに話しなんて出来なかつたので、少年が答えた。

「ああ、大丈夫です：：つてすいません俺の記憶違ひじや無かつたらあなたの名前は風間颯じや無いですか？」

「やつぱり和真だつたのか！久しぶりだな！…と言つて話を盛り上げたいんだが取り敢えずこの女性をどうにかしないとな」

「そうだな。大丈夫かアクラ、その、今日はもう帰ろう。受けたクエストは三日間でカエル五匹の駆除だけど俺達の手に負える相手じやない。もつと装備を整えてから挑戦しよう」

「ぐすつ……。女神が、たかがカエルなんかにこんな目に遭わされて黙つて引き下がれるもんですか！カエルに相手に引き下がつたなん

て信者に知られたら美しくも麗しいアクア様の名が廃るつてものだわ！」

ちなみにアクアと呼ばれた女性。今のアクアの姿はカエルの粘液でヌラヌラとてかっている。凄く汚い。立ち上がったアクアはそのままカエルに向かつて走つて行つた。

「あ！おい、待てアクア！」

アクアはカズマの制止も聞かずにカエルに殴りかかつた。

「神の力、思い知れ！ゴッドブロー！」

なんかさつきから神様を自称しているアクアが変な技名を叫びながら殴つた。だがその拳はカエルにめり込みカエルは何事も無かつたかの様にアクアを捕食した。

俺とカズマはアクアを助けにカエルに切りかかつた。アクアを助けた後俺はカズマに聞いた。

「なあ、自称神様のアクアは馬鹿なのか？」

「そうだな知力が最低レベルな位馬鹿だ」

「なんか見た目凄く綺麗なのに中身で損してゐるな」

「本当に勿体無いと思うよ、俺も」

カエルに再び捕食され泣きじやくつてゐる神様を連れて俺達三人は街へと戻つた。

新しい仲間・アークウイザード編

俺はカズマと一緒にいたアクアという人と酒場に来て いた。

「あれね、一人じや無理だわ。仲間を探しましょ う」

いきなりアクアがこんな事を言い出した。俺は良い機会だと思 い自分も仲間に入れてくれと頼んだ。

「あの、アクアだつたか？俺も仲間に入れてくれないか？」
「嫌よ。だつてあなた最弱職の冒険者でしょ？私は上級職を探して いるよ。分かつたらとつとどつとどつかに……つてカズマさん？この手は 何？ねえ、ちよつと痛くなつて来たんだけど！ねえ、カズマさん離し てよ！痛い痛い！」

カズマがアクアの首根っこを強く掴み俺に謝つて來た。

「すまない、ハヤテ。こいつ口が悪くてな。俺たちなら大歓迎だこれ からもよろしくな。俺の職業は冒険者でアクアがアークプリースト だ。プリーストの上級職だ。知力は壊滅的だが他の部分は優秀だか らこき使つてやつてくれ」

「なによ！カズマだつて運以外殆ど最低辺じやない！それに、私は水 の女神アクア様よ？あなたみたいな最弱職とは訳がちが痛たたたた た！」

アクアがカズマの悪口を言おうとするとカズマがまだ掴んでいた 首根っこを強く掴み直した。

「うん、まあ、よろしくな。カズマはまたこれからも仲良くやろうぜ」「おう！お前がいると心強いよ！」

「そう言つてもらえるとありがたいよ。アクアもよろしくな」

「あら？私は水の女神アクア様よ？きちんとアクア『様』と言ひなさい ？」

「良い加減にしろ、この駄女神！」

そう言つてカズマがアクアの頭を叩いた。

「なあ、流石にハードル下げないか？上級職だけ募集しても集まらないと思うんだが。ここって駆け出しの街だろ？絶対無理だろ」

うう、だつてだつて…」

昨日に求人の張り紙を出したのは良いが、条件を上級職だけに絞つていたので誰一人と来なかつた。今も待ち続けているが今の所こつちに来る人がいないので俺がハードルを下げようと提案した。

「ハヤテの言う通りこのままじやあ一人も来ないぞ？ 大体お前は上級職かもしれないが俺とハヤテは最弱職なんだぞ？ それに俺は強い能力とか持つてないし。……そういうハヤテはなんか特典もらえたのか？」

「ああ、俺はラーニングを貰つたよ。見ただけでスキルが覚えられる固有能力。使い勝手が良いと思ってこれにしたんだ」

「確かにRPGでそんなのあつたらチート級だな」

「おい、カズマ。ここはゲームの世界なんだぜ？俺はチート保持者となんら変わらないんだぞ？」

「そういえばそうだつたな。さて雑談も終わつたし俺は募集のハードルを下げに行つて…………」

カズマがそう言つて立ち上がるうとすると一人の女の子がこちらに歩いてきた。

?

氣だるそうな声、眠そうに開いた紅い瞳。肩口まで届くか届かない
かの長さの黒い髪。そして、黒マントに黒いローブ、黒いブーツに杖
を持ち、トンガリ帽子を被りさらに眼帯までしている典型的な魔法使
いの少女が声をかけて来た。

人形の様に可愛い女の子。年齢は12、3歳位だろうか？そんな小柄な少女がマントをバサッと翻し、

「我が名はめぐみん！アーヴィングを生業とし、最強の攻撃魔法、爆裂魔法を操る者…！」

「冷やかしに来たのか？」

カズマが突つ込むとめぐみんという少女は慌てて否定した。

「その赤い瞳。もしかしてあなた紅魔族？」

アクアは何か知っている様でめぐみんはその質問に頷き、俺に冒険者カードを渡して来た。

「いかにも！ 我は紅魔族随一の魔法の使い手、めぐみん！ 我が必殺の魔法は山をも崩し、岩をも碎く……！」という訳で、優秀な魔法使いはいませんか？ そして図々しいお願ひなのですが、もう三日も食べていませんか？ できないのです。できれば、面接の前に何か食べさせてくれませんか

…

お腹を押さえ悲しい視線を送るめぐみん。

「じゃあ俺が出すよ。何を食べたいんだ？」

「ありがとうございます！ ではこれとこれを…」

めぐみんに言われたものを頬みカズマが眼帯について触れたが怪我などではなくただのオシャレらしい。そしてアクア情報だと紅魔族と言う種族は生まれつき高い知力と強い魔力を持っていて、変な名前を持つているらしい。

「ちなみに両親の名前は？」

「母はゆいゆいで、父がひよいざぶろーです」

誰だ紅魔族に変な名前つけ始めた奴は。凄くダサいぞ。

「まあ、気になることはあるが強い魔力を持っていて上級職のアーヴィザードなら良いんじゃないかな？」

カズマがそう言うとアクアも承諾した様に頷いた。
「おいその気になることが何か聞こうじゃないか」
めぐみんは頼んだ飯を食べながら文句を言った。

爆裂魔法の威力と代償

俺たちはめぐみんと共に草原へ出ていた。

「爆裂魔法は最強魔法。その分魔法を使うのに時間がかかります。その準備が終わるまで足止めをお願いします」

「OK。任せた。カズマ、俺は先に行くぞ」

「おう、前衛は任せた。おい、行くぞアクア。今度こそリベンジだ。お前は元なんならなんだろ？ その元なんたらの実力を見せてくれよ」「元つてなによ！ 現在進行形で女神よ！」

と、後ろで何か騒がしいことになつていたが俺はそれを無視してジャイアントトードに向かつて走つて行つた。ファンタジーの世界といつても駆け出しの街の目の前にある草原にいる雑魚モンスターだ。多分こいつらはスライム的なポジションなんだろう。

ジャイアントトードは捕食しかしてこないようで、こちらに噛みつこうとするが、俺は俊敏が速いことを活かしてヒットアンドアウエイの戦い方をして一体を倒した。

そして一体を倒したところで後ろからめぐみんが魔法の準備が整つたことを知らされたのでめぐみんと同じところまで下がつた。

「見ていてください。これが人類が行える中で最も威力のある攻撃手段。これが究極の攻撃魔法です」

めぐみんの持つている杖の先に光が灯る。凝縮されたような光が小さいながらも眩しくらいに光つている。

そして見てている俺がとる行動はラーニング。究極の攻撃魔法。そんなことを聞かされたら覚えないわけにはいかない。

『エクスプロージョン』！

めぐみんの杖から一筋の光が飛び出す。その光がカエルに飛んでいき、カエルに当たると、突如俺たちは光に飲み込まれた。震える空気と大地。それが消えた頃にはカエルの姿は無くなっていた。カエルがいた場所は大きなクレーターが出来ており、その大きさは二十メートル以上の大きさだった。

「すつづー。これが魔法か…」

「この魔法強すぎるだろ…。明らかにオーバーキルじゃねえか…」
正直いって俺がこれを使うのはまだ先になるだろうと思った。魔力とか絶対足りないし。俺は冒険者カードを確認しスキル欄に『エクスプロージョン』と書かれていることを確認してポケットにしました。

そして、ふとめぐみんの方を向くとめぐみんが倒れていた。

「お、おいどうした？」

「ふ…。我が奥義である爆裂魔法は、その絶大な威力ゆえ、消費魔力もまた絶大。要約すると身動きが取れないので助けてくれませんか？あ、近くからカエルが湧き出してきました。やばいです。食われます。ちょ、助け…ひあっ…！」

俺とカズマはアクアとめぐみんを食べている間にカエルにとどめを指しジャイアントトード五四の討伐を完了した。

爆発音の後の帰り道

「うつ…うぐつ…。ぐすつ…。生臭いよう…生臭いよう…」

アクアはカエルに食われて粘液まみれになりカズマに手をひかれていた。そしてめぐみんは俺の背中におぶさつて「カエルの粘液つて良い感じに暖かいのですね」などといらない知識を増やしていた。

しかし、まさか魔法使いが魔力を使い果たすと生命力まで削られるとは思わなかつた。めぐみんは強力な爆裂魔法を撃つ代わりにその貧弱な体力を減らしていた訳だ。

俺だつたら絶対撃たないな…。

しかしラーニングをしているので俺の冒険者スキルには『爆裂魔法』としつかり記されている。

今後使う機会はなさそうだが。

「今後は爆裂魔法は緊急時以外使用禁止だな」

「そうちだなんにリスクがあるなら何度も使つていられないしな。

今度は他の魔法を使つてくれ」

俺の背中におぶさつているめぐみんが、肩を掴むてに力を込めた。

「……使えません」

「え？」

「使えません」

「もしかして爆裂魔法しか使えないのか？」

まさかと思いながらも俺はめぐみんに質問する。

「……そうです。私は爆裂魔法しか使えません。他にはいつさい魔法が使えません」

それを聞いたカズマが

「……マジで？」

「……マジです」

そこでやつと泣き止んだアクアが会話に参加する。

「爆裂魔法以外使えないってどう言うこと？爆裂魔法を習得できる程のスキルポイントがあるなら、他の魔法を習得していない訳が無いで

しよう？」

確かにRPGの世界ならレベルが上がりスキルポイントが手に入つても、いきなり最強の攻撃魔法には割り振れ無い。基本的には前提のスキルをとつてから習得するものだ。この世界は違うかもしないが…。

ちなみに俺がそんなことを思つている横でカズマはアクアにスキルポイントについて教えて貰つていた。

スキルポイントはレベルが上がれば手に入つたりするが、それ以外にも優秀な能力を持つ人は初期のポイントが多かつたりする。それ以外にポイントを手に入れる方法はスキルポイントが増えるポーションなんかがあるそうだ。

アクアは何故か宴会芸スキルを全習得してからアークプリーストのスキルを全習得したらしいが、宴会芸スキルなんてものがあるのか？いつ必要なんだ？

「爆発系の魔法つて複合属性つて言つて火や風系列の魔法の深い知識が必要なの。つまり爆発系の魔法を習得できるなら、他の属性なんて簡単に習得できるはずなのよ」

「爆裂魔法なんて上位のスキルを習得しているなら、下位の魔法を使えないわけが無いってことか。…で、宴会芸スキルつてのは何時どうやって使うんだよ？」

そんなカズマの疑問にはアクアは一切答えずにめぐみんがポツリと呟いた。

「…私は爆裂魔法をこよなく愛するアークウイザード。爆発系の魔法が好きなんじやありません。爆裂魔法が好きなのです」

「いや、まあ、敵を吹き飛ばすならあの魔法は最高だけどリスクが大きすぎるからなあ…」

「もちろん他の魔法を習得すれば冒険が楽になるでしょう。火、水、土、風。この基本の四属性だけでも取つているだけでも違います。…でも。ダメなんです。私は爆裂魔法しか愛せない。たとえ一日一回の魔法でも私は爆裂魔法しか愛せないので！」

キラキラと目を輝かせ熱弁しているめぐみんにアクアが感動して

いた。

俺は「まあ、ロマンちゃんあロマンだが…」と思つていた。

「そつか。多分茨の道だろうけど頑張れよ。それじゃあギルドに着いたら報酬を山分けしよう。うん、まあ、また機会があれば何処かで会うこともあるだろ」

そう言つてめぐみんにさようならをしようとするとめぐみんの手にさらに力が入る。

「我が望みは魔法を放つこと。報酬などおまけに過ぎず、なんなら山分けでなく、食事とお風呂とその他雑費を出してもらえるなら、我は無報酬でもいいと考えている。アーツクワイザードである我が力が今なら食事とちよつとだけ！これはもう、長期契約交わすしかないのでは無いだろうか！」

これはもう、怪しい商品を売りつけてくるのとおんなじでは無いだろうか？

俺はこういうのは可哀想であまり見捨てたくはないのだが：能力的には仕方ない。俺らのリーダーはカズマだしな。

めぐみんの言葉にカズマはご遠慮願うとばかりに断つていたが街の人には「小さい子を捨てようとしている」

「粘液まみれの女の子を連れている」

などなどいろいろな誤解を受けている。めぐみんは口を歪めて

「どんなプレイでも大丈夫ですから！先ほどのカエルを使つたヌルヌルプレイだつて耐えて見せ「よーし分かつた！めぐみん、これからよろしくな！」……よし！」

俺は苦笑しながら粘液で濡れていない所の髪を優しく撫でて言つた。

「これからよろしくな、めぐみん」

「はい、よろしくお願ひします！」

その顔には笑顔が溢れていた。

二人目の上級職

めぐみんを仲間に加えた俺たちはギルドに来ていた。

「はい、確かに。ジャイアントトードを三日以内に五匹討伐。クエストの完了を確認致しました。ご苦労様でした」

受付に報告を終えて、規定の報酬を貰う。俺はクエストを受けていなかつたので報酬はカズマ達のものなので俺は貰わない事にした。

現在俺のレベルは3だ。カエルを自分で2匹でこの程度である。カズマも自分のレベルを見ていたらしい。

「本当にゲームの世界なんだな…」

「ああ、モンスターを倒すだけでレベルが上がつて強くなるんだな…」
めぐみんは俺たちを見て首を傾げるだけだった。

レベルが上がつたのでスキルポイントも上がつていた。俺のスキルポイントの初期値は5なので、今は2上がつて7だ。

正直に言つてスキルポイントを使わなくても誰かの魔法、技を見るだけでラーニングが発動してスキルを覚えるのでスキルポイントを使わなくても良いと言うチートである。このまま貯め続けても良いかもしねない。

「ではジャイアントトード一匹の買い取りとクエストの達成報酬を合わせまして、十一万エリスとなります。ご確認ください」

と言つて、受付の人気がカズマにお金を渡す。
「ハヤテ様もどうぞジャイアントトード一匹の買い取りで一万エリスです。ご確認ください」

そう言えば俺は別に二匹倒していたんだつた。思わぬ所で収入があつたのでありがたい。
これからどうしようかとカズマと相談しようとすると女性が話しかけてきた。

「…すまない、ちょっと良いだろうか？」

その姿は女騎士。身長約170センチ、金属鎧に身を包んだ、金髪碧眼の美女だ。

「あ、えーっと、なんでしようか?」

若干上擦った声でカズマが応える。

「うむ。この募集は、あなたのパーティーのものだろう? もう人の募集はしていらないのだろうか」

カズマとアクラが貼った募集の紙。めぐみんをパーティーに入れてくれる、まだはがしていなかつた事を思い出す。

「あー、まだパーティーメンバーは募集してますけど、あまりオススメはしませんよ?」

「ぜひ私を! ゼひ、この私をパーティーに!」

カズマがやんわりと断ろうとすると女騎士が、カズマの手をガツと掴んだ。

「い、いやいや! ちょっと、待つて待つて、色々と問題があるパーティーなんですよ。仲間2人はポンコツだし、俺ともう一人のやつは最弱職で、さつきだつて仲間二人が粘液まみれにな、いだだだだつ!」

粘液まみれというワードを聞くと女騎士の手にさらに力が入った。「やはり、先ほどの粘液まみれの二人はあなた達のなかまだつか! 一体何があつたらあんな目に……! わ、私も……! 私もあんな風に……!」

うわー。この人Mだ。俺的には苦手な人である。

俺がMだなと思っていると、女騎士はすぐに訂正した。

「いや違う。あんな年端もいかない一人の少女、それがあんな目に遭うだなんて騎士としては見過せない。どうだろう、この私はクルセイダーというナイトの上級職だ。募集要項にも当てはまると思うのだが」

正直に言つて俺は無理だ。ドSや、ドMと言つた人達は俺には無理である。近づけない、喋れないというわけでは無いが、常に距離をおくくなる人達だ。

しかしパーティーリーダーはカズマなので全てあいつに任される。そしてカズマも断ろうとしていたのだが、この人の駄目な部分が更に出て来た。

「実は、私は耐久力と力には自身があるのだが不器用で……。その、攻

撃が全く当たらないのだ……」

そう言いながらカズマに近づいて行く。カズマは断ろうとしたのだが、粘液まみれになるかもしれない、という言葉を聞いてもやはりと言うか「望む所だ！」と胸を張つて言つた。カズマも断りきれなかつたのか取り敢えず様子見となつた。

盗賊の少女

「なあ、ききたいんだがスキルの習得ってどうやるの？」

カエル討伐の翌日。カズマ達と昼食をとつていた。俺とカズマは普通に食べ、めぐみんは一心不乱に定食を喰らい、アクアは近くの店員におかわりを注文していた。そしてカズマの質問に答えたのは定食を食べていためぐみんだった。

「スキルの習得ですか？カードに出ている、現在取得可能なスキルつてどこから……。ああ、カズマは冒険者でしたね。冒険者は誰かにスキルを教えて貰うんです。目で見て、やり方を教わると、カードに取得可能なスキルとして出てきます。後は、それにポイントを使つて習得できます」

「カズマお前なんも知らないな。最初の受付の人にも教えて貰つたと思うんだが？」

「あ、あの時はちょっとぼーっとしててな…」

完全に忘れていたカズマであった。

「じゃあ、めぐみんに教えてもらえば、俺も爆裂魔法撃てるようになるのか」

「その通りです！」

「うおっ！」

カズマの何気ない一言に、意外に食いつきを見せるめぐみん。

「その通りですよカズマ！まあ、習得に必要なポイントはバカみたいに食いますが、冒険者はアークワイザード意外で唯一爆裂魔法が使える職業です。爆裂魔法を覚えたければ幾らでも教えて上げましょう。と言ふか今から早速覚えに行きましょう！ハヤテも行きましょう！」
「ちよ、落ち着け口りつ子！つーかスキルポイントってのは今3ポイントしかないんだが、これで習得できるのか？」

「ろ、口りつ子…!?」

「ま、まあ、俺は既に爆裂魔法覚えてるからな。他のスキルを…」

「な、なんですつて！」

更に興奮しためぐみんが顔を近づけてくる。

「い、いつ！ いつ習得したのですか！」

「お、落ち着けってめぐみん！ 習得したのは昨日だ。めぐみんが爆裂魔法を撃つたのを見たからな」

「撃つた所を見ただけで習得したと言うのはどう言うことですか！」

「めぐみんの興奮が止まらないので早急にネタバラシをする。

「落ち着けって。俺はラーニングつている特殊能力を持つているんだ。この能力は、見たスキルを一瞬で覚えることができるんだ。だから見ただけでスキルを習得できるんだよ」

そうめぐみんに言うと。口をぽかーんと開けていた。信じられないかっただろう。そりやそうだ。こつちの世界の人にとってはそれもあり得ないことである。

「信じてくれるなんて思つてないから大丈夫だぞ。今度見せる機会もあるだろうしな」

「じゃあ今度に期待することにします」

めぐみんとの会話が終わると、横から声がかけられる。

「君たちがダクネスが入りたがっているパーティの人かな？ 有用なスキルなら盗賊スキルなんてどうかな？」

冒険者ギルドの裏手の広場で俺達は今さつき出会つた盗賊のクリスと言う少女にスキルを教えて貰うことになつた。

「めぐみん、俺のカードだ。今からラーニングを使って盗賊スキルを覚えるから見ててくれ。ちゃんと発動したらスキル欄に追加されるから」

「分かりました」

今の俺のスキル欄には『エクスプロージョン』しかない。俺を見ればめぐみんは多分信じるだろう。

「じゃあ話し合いも終わつたようだし、『敵感知』と『潜伏』を行つてみようか。じゃあダクネス、向こう向いてて？」

「ん？ 分かった」

言つていなかつたが昨日のドMのダクネスも来ている。そして、ダクネスは反対方向を向いた。クリスはと「言うとちょっと離れた樽の中に入った。」多分これが『潜伏』なんだろう。

めぐみんは俺のカードを見て驚いていた。と言ふことは多分覚えたんだろう。本当に楽な特殊能力である。

クリスは更にダクネスに石を投げつけた。ダクネスは振り向きクリスが隠れている樽に向かつて歩き出す。クリスは

「敵感知…、敵感知！ダクネスの怒つている気配をピリピリと感じるよ！…ねえダクネス？これはスキルを教えるために仕方なくやつてることだからああああああああ！」

そのまま、樽に入つたまま転がされていた。

次はクリス一押しの『竊盜』を教えてくれるらしい。ようは相手のアイテムをランダムに奪うと「言うスキルだ。

「じゃあまずカズマに使つて見るからね？『ステイール』！」

クリスが手を前に突き出して、叫ぶ。するとその手にはカズマの財布が握られていた。

「俺の財布！」

「お、当たりだね。こんな感じで使うわけさ。それじゃ、財布を…」

クリスが渡そうとしていた財布を引っ込めこんな事を言つてくる。「ねえあたしと勝負しない？カズマが竊盜スキルを使つてあたしのアイテムを盗む。それはこの財布と交換つて事。どう？やる、やらない？」

？」

カズマはこの賭けに乗りスキルを覚えてクリスの目の前に立つ。

「さあ、何が取れるかな？財布が敢闘賞。当たりは魔法が掛けられたこのダガーだよ！残念賞はさつきダクネスにぶつけるために多めに拾つた石だよ！」

「ああー・きつたねえ！そんなのありかよ」

確率的には石が多いんだろうと思う。まあ、財布とその辺の石ころが交換となると最悪である。気持ちはわからなくもない。

「くらえ！『ステイール』！」

そしてカズマが握ったアイテムは…！

クリスのパンツだつた。

「ヒヤッハー！当たりも当たり！大当たりだ！」

「いやああああああああ！ば、パンツ返してええええええ！」

クリスが自分のスカートの裾を抑えながら涙目で絶叫した。

カズマの運そして変態クルセイダー

クリスはパンツを返してもらうのと引き換えにカズマの財布とクリスの財布を渡した。そのため一文無しになつてしまつたので臨時のパーティを組んで稼ぎに出かけた。

「で？ダグネスさんは行かないの？」

「うむ。私は前衛職だからな。前衛職なんて何処にでも有り余つていい。でも盗賊はダンジョン探索に必須な割りに、地味だからと言う理由であまり人がいないから需要なら幾らでもある」

「だけどもう夕方だぜ？今からダンジョン探索に行くのか？」

俺の疑問に答えたのはめぐみんだつた。

「ダンジョン探索はできることなら朝一で突入するのが望ましいです。なので、ああやつてダンジョン前で朝までキャンプするんですよ。ダンジョン前にはそういうつた商売すら成り立っていますしね。それで？カズマは無事にスキルを習得できただんですか？」

「まあ、見てろつて。いくぜ！『ステイール』!!」

カズマがめぐみんに手を突き出しスキルを発動する。その手には白い布が握られていた。

ぱんつである。

「……なんですか？レベルが上がつてステータスが上がつたから、変態にジョブチェンジしたんですか？……あの、スースーするのでぱんつ返してください……」

「あ、あれ？おかしいなあ、こんなはずじや…。ランダムで何かを奪うはずなのに……」

顔を赤らめてスカートの裾を抑えているめぐみんにぱんつを返したらダクネスが椅子を蹴り飛ばし机を叩きながら立ち上がる。

「やはり…やはり私の目に狂いは無かつた！こんな幼気な少女の下着を公衆の面前で剥ぎ取るなんて、なんと言う鬼畜！是非とも…！是非とも私をこのパーティーに入れて欲しい！」

「いらない」

カズマがバツサリと断る。だがドMのダクネスにはご褒美のように聞こえているらしく「んつ……くう……！」などと言っている。

「そいいえばさハヤテもステイール出来るようになつたんだろう？やつて見させてくれよ。めぐみん相手に」

こいつ俺も巻き込もうとしてやがる…。ドMクルセイダーもめぐみんもこつちを見ているので取り敢えずめぐみんに確認を取る。

「えっと、めぐみん。お前にステイールするけどいいか？」

「大丈夫ですよ。カズマみたいに変な物を取らないならですけど」

「そ、そこはランダムだから、変な物取っちゃつたら許してくれ」

始めてまともに使えるスキルを手に入れてこの世界に来て始めて使うスキル。少しワクワクしながらも俺はそのスキルを放つた。

「いくぜ！『ステイール』!!」

そして俺が握っていたのはめぐみんが手に持つてある杖だった。何時の間に取つたのだろうか。

「おお！こんな感じなんだな！」

「私の杖が何時の間にか目の前に！本当にステイールって何時の間に取られるんですかね？」

「くそッ！なんで俺だけ変な物を取つてしまふんだ…！」

「普通だな。と言うことはこの前の力エルのプレイはカズマがやつたのか…！思い出しただけでも…んつ…くう…！」

と、めぐみん、カズマ、ダクネスの順に感想を述べる。取り敢えず取つた杖はめぐみんに返しておく。

「あれ？カズマさんこの人誰？昨日言つてた面接に来た人？」

「そいいえば断ると行つていきましたけど、この方クルセイダーですよ？断る必要なんて無いのではないですか？」

俺は是非とも断つて欲しい所だ。本当に何故だか分からぬがドMは嫌いだ。

「ダクネス聞いて欲しい。実は俺とアクアとハヤテはマジで魔王を倒そうと思つて いるんだ」

あれ？俺そんなこと言つたつけと思いカズマを見ると。話に合わせてくれとハンドサインを送つて来たので合わせることにする。

このハンドサインは俺らが中二病の頃2人にしか分からぬような事を考えようと思いついた物だ。中二病にかかつてていたとはいえ、かなりの出来なので中二病が治つても授業中にカズマとハンドサインを使って会話したりもした。まあ、機から見たらかなりの恥ずかしいと思うが。

「そうだな、めぐみんもついでだし聞いて欲しい。俺たち三人は魔王を倒そうと冒険者になつたんだ。過酷な旅になるかもしない。それでも良いのか？」

「特にダクネス。女騎士のお前なんて魔王に捕まつたらそれはもう大変な目に遭うかもしれないぞ」

そんな脅しのような言葉を掛けるが、

「ああー全くその通りだ！昔から魔王に工口いことをされるのは女騎士と相場が決まっている！それだけでもついていく価値がある！」

「えつ！？」

「えつ？…私は何か変なことを言つただろうか？」

思いつきり言つたよ…」の人もう手遅れだな。

「めぐみんも聞いてくれ。相手は魔王。この世で最強の相手に喧嘩を売ろうと思っているんだ、俺たちは。そんなパーティーに無理して残る必要は…」

無い、とカズマが続けようとすると、めぐみんが突然立ち上がり、マントをバサッ！と翻しながら。

「我が名はめぐみん！紅魔族随一の魔法の使い手にして爆裂魔法を操りし者！我を差し置いて最強を名乗る魔王！そんな存在は我が最強魔法で消し飛ばして見せましよう！」

おおう。中二病全開ですね。もう一人ともやる気になつてるし。
『緊急クエスト！緊急クエスト！街の冒険者の各員は至急冒険者ギルドに集まつて下さい！繰り返します！街の冒険者の各員は至急冒険者ギルドに集まつて下さい！』

今度は一体なんだ？そう思わずにはいられなかつた。

キヤベツ収穫クエスト！

「なんだ、緊急クエスト？モンスターが街に攻めてくるのか？」

俺の質問にダクネスが嬉々とした声音で言つてきた。

「ん、多分キヤベツの収穫祭だろう」

「そろそろ収穫の時期ですね」

めぐみんも追加で情報をくれたが全くわからない。なんでキヤベツを収穫するのに緊急クエストなんて出されるのだろうか？俺が考えている間にカズマが同じような質問をしていた。

「は？キヤベツ？キヤベツってモンスターの名前か何かか？」

するとダクネスとめぐみんが可哀想な人を見る目でカズマを見る。「キヤベツとは緑色丸いやつです。食べられる物です」

「噛むとシャキシャキと歯ごたえのある美味しい野菜の事だ」

「そんなこと知つとる！じゃあ何か？緊急クエストだの騒いで、冒険者に農家の手伝いをさせるのか？」

「あー、カズマとハヤテは知らないんでしようけどね？ええつとこの世界のキヤベツは…」

アクアが説明を終える前にギルドの職員が大声で説明を始めた。

「皆さん、突然のお呼びだしすいません！今年もキヤベツの収穫祭がやつて参りました！今年のキヤベツは出来が良く、一玉につき一万エリスです！では皆さん、できるだけ多くのキヤベツを捕まえて、ここに納めてください！報酬の支払いは後日まとめてとなります！」

……は？キヤベツ一玉一万エリス？この世界のキヤベツは一体どうなっているんだと思いながらギルドを出るとキヤベツが飛んでいた。

アクアが説明したのを簡単にまとめると、この世界のキヤベツは飛び、大陸を渡りひつそりと息を引き取るのだそうだ。なら自分たちが美味しく頂こうと言うわけらしい。

「俺、馬小屋に帰つていいいかな？」

横からそんな声が聞こえてきた気がする。他の冒険者は歓声を上

げてキヤベツに向かつて走つていく。俺はそれを見て叫んだ。

「なんなんだこの世界は!!!」

そして走る。

……キヤベツに向かつて。

収穫祭が終わり皆でギルドでキヤベツ料理を食べていた。

「ああ、美味しいな」

それなりにスキルを使ってキヤベツを収穫したが何かが違う。異世界まで来てキヤベツを収穫して俺つてなんなんだろうか？

「しかし、やるわねダクネス！あの鉄壁の守りは流石のキヤベツ達も攻めあぐねていたわ」

「いや、私など、ただ硬いだけの女だ。私は不器用で動きも速くは無い。その点めぐみんの魔法は凄かつた。キヤベツの群れを爆裂魔法一つで吹き飛ばしていたでは無いか」

「ふふ、我が必殺の爆裂魔法において、何者も抗うことなど叶わず。それよりもカズマの活躍こそ目覚しかつたです。魔力を使い果たした私を素早く回収して背負つて帰つてくれました」

「私がモンスターに囮まれ袋叩きされてるときもカズマは颯爽と現れキヤベツを収穫してくれた」

「確かに、潜伏スキルで気配を消して、敵感知で素早く動きを補足し、背後からのステイールで強襲するその姿はまるで暗殺者の如しです」「カズマ良く仲間を見てるんだな」

「そういうハヤテはどこにいたんだよ。全然見当たらなかつたぞ」「悪かつた。ちよつと半狂乱になりながらキヤベツを収穫してて、あまり覚えていないんだ。今後はこんなこと無いようにするよ」

そしていつの間にか決まつていた事が一つある。

「では、名はダクネス。職業はクルセイダーだ。一応両手剣を使つてはいるが戦力として期待しないでくれ。何せ不器用すぎて攻撃がほとんど当たらん。だが壁になるのは大得意だ。よろしく頼む」
　　はい、仲間が一人増えました。

自己紹介をダクネスが終えるとアクアが満足気にパーティーを見渡し、

「ふふん、ウチのパーティーもなかなか、豪華な顔ぶれになつて来たんじゃないの？アーフプリーストの私、アーフウェイザードのめぐみん。そして防御特化のクルセイダーであるダクネス。そして特殊能力持ちのハヤテ。五人中三人が上級職、さらに一人が特殊能力持ち。こんなパーティーそうそう無いわよカズマ？あんた凄くついてるわよ？」

感謝なさいな」

詳細を言うと、一日一発の魔法使い、攻撃が当たらない前衛職、未だに一回も役に立つて居る所を見たこともないプリースト。なんだこれ？

はあ…。こんなに上級職が多いパーティーなのに不安しか無いのは俺だけなんだろうか…？

スキルポイントの使い道

俺たちは今墓地にいる。アクアのレベル上げも兼ねてアンデッドモンスターの討伐クエストを受けた。

あのキャベツ収穫クエストの日でレベルが上がりレベル7になつたので手に入れたスキルポイントを使おうと他の冒険者にスキルを教えてもらつた。覚えたスキルは『二刀流』『初級魔法』『中級魔法』だ。そして教えてもらつたは良いが、スキルポイントを使わずに習得できるので、スキルポイントを一切使っていない。これでは溜まる一方なので、自分でスキルを開発することにした。まだ考え中なので、どんなスキルにするかは決まっていない。

初級魔法は攻撃性が皆無なので中級魔法を教えてもらつたはのだが教えて貰つた子がめぐみんと同じ様な服を来ていていたので聞いてみると、やはり紅魔族だつた。名前はゆんゆんと言つていたので今度覚えていたらめぐみんを聞いてみようと思う。

まあ、そんなこんなで何が言いたいかと言うと、新しいスキルを使つて見たいと言うことだ。

しかし相手がアンデッドモンスターなのでこちらの攻撃はアクアくらいしか良いダメージは出ないだろう。

「？敵感知に引っかかつたな。いるぞ、一体、二体……三人、四体？」
今回討伐するアンデッドモンスターのゾンビメーカーと言うのは、取り巻きのゾンビが二、三体らしい。

予定より少し多いが問題ないだろう。そんな事を考えていると、墓地の中央に青白い光が走る。

大きな魔法陣を見る。そしてその隣には黒いロープの人影が見えた。

「あれ？ゾンビメーカーではない…気が……するのですが…」
めぐみんが自信なさげに呟く。

突然アクアが叫びロープの人影に向かつて走り出した。

「リッチャーがノコノコこんな所に現れるとは不届きな！成敗してやる

！」

リツチーとは魔法を極めた大魔法使いが魔道の奥義により人の身体を捨てた、アンデッドの王。結構メジャーな存在である。そして今そのアンデッドの王が、グリグリと魔法陣を踏みにじるアクアの腰に何ながらしがみつき、食い止めていた。

とりあえずアクアと止めてリツチーと会話する。

「大丈夫か？ えっと、名前は？」

「助けていただいてありがとうございます。私はリツチーのウイズと申します」

俺の質問に大丈夫と言うウイズ。なんか全然強そうに見えない。

「ウイズ？ あんた、こんな墓場でなにしてるんだ？」

「私はアンデッドの王で、ノーライフキングなんてやつてます。アンデッドの王なんて呼ばれるくらいですから、私には迷える魂の話が聞けるんです。この共同墓地の魂の多くはお金が無いため口クに葬式すらしてもらえず、天に還ることなく毎晩墓地を彷徨っています。それで、私は定期的にここを訪れて、天に還りたがっている子達を送つて上げているんです」

カズマの質問に事情を話すウイズ。良い人なんですけど。さらに話を聞くと、ここ街のプリーストは金儲けのことしか考えておらず、金の無い連中が埋葬されているこの墓地を、供養しなかつたらしい。

「それなら仕方ないな。でも、ゾンビを呼び起こすのはどうにかならないか？ 俺たちがここに来たのは、ゾンビメーカーを討伐してくれつてクエストを受けたからなんだが」

カズマの言葉に困った表情を浮かべ。

「あ、そうでしたか。その、呼び起こしているのではなく、私の魔力に反応して勝手に目がされちゃうんです。……その、私としてはこの墓地に埋葬されている人達が、迷わず天に還つてくれれば、ここに来る必要もなくなるんですが……どうしましょう？」

話し合つた結果、アクアが定期的にこの墓地に浄化しに行くことで折り合いがついたが、その事でゾンビメーカー討伐の事を完全に忘れていた。

クエスト失敗

「知つてるか？なんでも魔王軍の幹部の一人がこの街からちよつと登つた丘にある、古い城を乗つ取つたらしいぜ」

冒険者ギルドに併設されている酒場で俺とカズマは情報収集をしていた。

「魔王軍の幹部ねえ。物騒な話だけど俺達には縁のない話だよな」

「違ひねえ」

「少しくらいは自分の身をあんじろよな」

「そんなに心配しなくともこの街なんかには来ないさ。まあ、しばら

くは廃城近くのクエストは避けた方が良いだろうな」

「そうしておくよ。じゃあ俺達はこれで。また、今度飲みに行こうな」

「おう！ 楽しみにしてるぜ！」

俺とカズマは冒険者と分かれて自分達のパーテイーのテーブルへと向かう。すると野菜ステイックをポリポリと食べながらアクアとめぐみんとダクネスが俺達を見てきた。

「なんだよ？」

「別にー？ カズマとハヤテが他のパーテイーに入つたりしないか心配なんてしてないし」

アクアがちよつと不安そうな目でチラチラ見てくる。カズマがアクアの野菜ステイックを食べようとすると野菜ステイックが逃げる。この世界の野菜つて凄くね？

今度はめぐみんが俺を見て呟く。

「…もう。楽しそうですねハヤテ。他のパーテイーと随分したし気でしたね？」

めぐみんが拳を作りテーブルドン！と叩き野菜ステイックを怯えさせて口に運ぶ。

「あ、そんな食べ方するのね。

「…なんだこの新感覚は？カズマが他所のパーティーで仲良くやつて
いる姿を見ると、胸がのやもやする反面、何か、新たな快感が…。も
しや、これが噂の寝取られ……？」

「このドMはもう知らない。

「はあ、今はどうでもいいや。それより聞きたいことがあるんだろ、力
ズマ？」

「そうだ、お前らこれからどんなスキルを取るのかなって思つてな。
このパーティーはバランスが悪いから自由の利く俺とハヤテが穴を
埋める感じで行きたいんだが…。そういうやお前らのスキルつてど
んな感じだ？じやあダクネスからどうぞ」

なんか発表会みたいな感じで言われたダクネスは自分の習得スキ
ルを言った。

「私は『物理耐性』と『魔法耐性』、各種『異常状態耐性』で占めてい
るな。あとは『デコイ』と『凹スキル』くらいだ」

「間違つても『両手剣』スキルとかは取らないんだな」

「取らない。私は言つてはなんだが体力と筋力には自信がある。攻撃
が簡単に当たる様になつてしまつてはら無傷でモンスターを倒せる
様になつてしまつ。かといって、手加減してわざと攻撃を受けるのは
違うのだ。こう、必死に剣を振るうが当たらず、力及ばず圧倒され
しまうと言つのが気持ちいい」

「もういい、お前は黙つてろ」

ダクネスは何故か顔を赤らめて何かに耐えていた。ダクネスに見
向きもせずカズマがめぐみんに向くと少し首を傾げて口を開いた。

「私はもちろん爆裂系のスキルです。爆裂魔法の威力上昇、高速詠唱
などですね。最高の爆裂魔法を放つためのスキル振りです。これま
でも、これからも」

「…どう間違つても、中級魔法スキルとかは取る気はないのか？」

「無いです」

「あ、中級魔法ならもう覚えたから大丈夫だ。魔力が弱いから威力は

低いけどな

「おお！これで一つ悩みは無くなつたな。でも、誰に教えて貰つたんだ？」

「紅魔族の女の子だよ」

「その子の名前は誰ですか？」

「ゆんゆんって言つてたな」

めぐみんはゆんゆんの名前を聞くとびっくりした顔でこちらを見た。

「どうしたんだ？」

「いえ、あのゆんゆんが、あの人見知りの子が男の人と会話したと思うと驚きで…」

「まあ、最初全然喋ってくれなかつたしな。俺の話はいいじゃないか」「では後で教えてください」

「分かつたよ」

「まあ、こんなものか。でもやつぱり偏つてるな」

「ねえ！私は！」

最後に聞かれなかつたアクアが喚く。カズマは目も合わせずに。「お前はいい

「ええ!?」

と言い放つた。アクアが取るのは多分宴会芸なんだろうなと俺も思つたので追求しなかつた。

「なんでこんなにバランスが悪いんだろうか…。全く纏まり無いし。本当に移籍を考えたくなるぜ…」

カズマが言つた言葉に三人がピクリと反応したので一応フオローを入れてやることにした。

「でも、個性的なメンバーだけど、個々の力は凄いんだよな…。一日一発の魔法と、攻撃が当たらない前衛、そして未だ全く役に立つてないプリーストだけどな…」

最後は結局俺も本音を出してしまい、三人は少し体が震えているのだつた。

スキルの作り方

キヤベツ収穫クエストから数日が経過した。アクアが「それぞれ手にした報酬はそのままに」と言つたので各自思い思ひに報酬を使つている。

「カズマ、みてくれ。報酬が良かつたから、鎧の強化を頼んでみたんだが…どうだ？」

「なんか成金趣味の貴族のボンボンが着けてる鎧みたい」

「わ、私だつて普通に褒めて欲しい時もあるんだぞ…」

と、少しダクネスが落ち込み気味に言つた。そして少し気持ち悪いのがめぐみんである。

「ハア……ハア……。た、たまらない、たまらないです！魔力溢れるマナタイト製の杖とこの色艶……。ハア……ハア……」

「おい、めぐみんかなり気持ち悪いぞ」

俺がそんなことを言つてもめぐみんには聞こえていないみたいなので今は無視することにする。俺も換金が終わつて金に余裕がある。何に使おうかと悩んでいた時に知つていてる声が聞こえた。

「なんですつてえええええ！ちょっとあんたどう言うことよ！」

何かと思うとアクアがギルドの受付のお姉さんの胸ぐらを掴み文句を言つている。

「なんであんなに捕まえて5万ぽつちなのよ！どれだけキヤベツ捕まえだと思つてんの！十や二十じやないはずよ！」

「そ、それが申し上げにくいのですが……。アクア様が捕まえて来たのはほとんどがレタスなので…」

「なんでレタスが混じつてるのよ！」

「わ、私に言われましても！」

アクアはこれ以上は無駄だと思つたのか、カズマの所に行つた。多分、金を借りるのだろう。

「カズマさん、今回の報酬おいくら万円？」

「百万ちょいだな」

「「「ひやつ!?」」

……驚きである。俺でも50万ちよいなのに、なんであいつは俺の倍も貰つていいのだろうか。

「ちなみにこの金は使い道決めてるからな。貸さないぞ」

「カズマさああああん！私、クエスト報酬が相当な額になるつて踏んで、この数日で、持つてたお金全部使つちゃつたんですけど！ついで、大金入つてくるつて見こんで、こここの酒場に十万近いツケまであるんですけど!!今回の報酬じや足りないんですけど!!」

バカだな何て思いながら俺はこつちに被害が飛んでこないようにしてアクアとカズマのやりとりを見ていた。

結局カズマが折れてアクアに金を貸してしまったとさ。

「ハヤテ、カズマ！早速討伐に行きましょう！それも、沢山の雑魚モンスターがいるやつです！新調した杖の威力を試すのです！」

突然めぐみんがそんなことを言い出した。

「俺もゾンビメーカー討伐じや、結局覚えたてのスキルを試す暇も無かつたからな。安全で無難なクエストでもこなしに行くか」

「いいえ、お金になるクエストをやりましょう！ツケを払つたから今日のご飯代もないの！」

「いや、ここは強敵を狙うべきだ！一撃が重くて気持ちいい、凄く強いモンスターを……！」

と、カズマ、アクア、ダクネスが順に言つた。俺は別に死なないクエストなら何でもいいので取り敢えず掲示板を見に行つた。

「……おい、何だこれ？全然依頼がないぞ」

「は？ マジかよ。どうしようか？」

「ちょっと受付の人聞いてくるよ」

俺は受付に移動して何故依頼が少ないので聞くと、最近魔王軍の幹部らしい奴が、町の近くの小城に住み着いたらしい。それで弱いモンスターは隠れてしまい、高難易度の依頼しか残らなかつたそうだ。来月には王都の騎士団が来るのでそれまでこんな依頼しかないそう

だ。

「……だつてよ」

それを皆に伝えると、アクアが叫んだ。

「な、なんでよおおおおお！」

こればっかりは可哀想だと思ったよ。

そんなこんなでクエストも受けられないでの、町の人に聞き、強い魔法使いの所に来た。少し聞きたいことがあつたからだ。そして俺は今は道具屋の前にいる。

『ウイズ魔法具店』

これ絶対あの人人の店だろ…。

取り敢えず俺は中に入った。

「どうも～」

「いらっしゃいませ。あら？あなたはこの前の…」

「そういえばあの時自己紹介して無かつたな。俺はハヤテだ、よろしくウイズ」

「はい、よろしくお願ひします。それでハヤテさんはどうしてここに？」

「そうだ、俺少し聞きたいことがあつて…」

俺が聞きたかったことはスキルと言うのは作れるのかと言うことだ。もしこの世界で新しいスキルが作れるのならやつてみたいのである。というかやつてみたいだけだ。本当に。

だつて、この世界で俺が作つたスキルが使われるんだぜ？俺凄くね

？

「はい、スキルは作れますよ。ですが完成までに時間がかかるので、やる人がいないんです」

「ちなみにどれくらいかかるんですか？」

「そうですねえ。ざつと五十年くらいでしようか？」

「ごじゅう!? そんなにいたら俺もう六十超えるじゃん！」

「どうにか出来ないんですかね？」

「うーん、作り方は分かるのですが後はセンスの問題で大抵の人はそこで躊躇んです。固定概念みたいなものがあるので」

「まあ、一回頑張つて見るんで作り方を教えてくれませんか？」

「話すと長くなるんですが、よろしいですか？」

「大丈夫です。よろしくお願ひします」

魔王の幹部がどつかに行くまで時間が掛かるので、問題はない。

俺は事が動くまでウイズにスキルの使い方や魔法の基礎などを教

えてもらうことになった。

魔王軍幹部登場

ウイズにスキルの作り方を教えて貰ったが、なかなかに難しく手間取っている。俺が今作ろうとしているのはパッシブスキル『魔力消費量軽減』である。だがこれは効率的に魔力を手や杖などに持つて行かないといけないので、難しい。何気にあと少しつて所までは来ているのだが、そこからが上手く行かない。急いでいるわけでも無いので気長にやって行こうと思う。

『緊急！緊急！全冒険者さんの皆さんは、直ちに武装し、戦闘態勢で街の正門に集まつてください！』

俺たちはその放送？を聞き武装して、街の正門に集まつた。なんとそこにいたのは上位のアンデッドモンスター、デュラハンだつた。

漆黒の鎧を身に纏い左脇に己の首を抱え、兜に覆われた自分の首を自分達の前に差し出した。

「…俺は、つい先日、この近くの城に越して来た魔王軍の幹部だが…」
やがて首はプルプルと震えだし……！

「毎日毎日毎日！俺の城に、毎日欠かさず爆裂魔法を打ち込んでくる頭のおかしい大馬鹿者は、だれだああああ！」

俺は頭を抱えたくなつた。

そして、その言葉に周りの冒険者がめぐみんに視線を集めめた。

そしてめぐみんはフイツと自分の隣にいた魔法使いの女の子を見る。

それに釣られて周りの皆もその子に視線を……

「ええっ!?あ、あたし!なんであたしが見られてるの!?爆裂魔法なんて使えないよ!!」

ですよね。そしてめぐみんを見ると冷や汗だろうか。物凄く汗を流していた。ため息を吐き、嫌そうに前に出る。そしてデュラハンとめぐみんが対峙する。

「お前が…！お前が毎日毎日俺の城に爆裂魔法をぶち込んでくる大馬鹿者か！俺が魔王軍幹部だと知つていて喧嘩を売つてはいるのか！そうちなら、正々堂々と城に攻め込んでくるが良い！何故こんな陰湿な嫌がらせをする！低レベルだらけの街だからと思つて放置しておれば、調子に乗つて毎日毎日ポンポンと撃ち込みおつて！頭おかしいのか貴様！」

「我が名はめぐみん！アーヴィングードにして、爆裂魔法を操るもの……！」

「めぐみんってなんだ、バカにしてるのか？」

「ちつ、違わい！」

デュラハンに突っ込まれたが、めぐみんは調子を取り直す。

「私は紅魔族の者にして、この街随一の魔法使い。我が爆裂魔法を放ち続けていたのは、魔王軍幹部のあなたをおびき出すための作戦……こうしてまんまと街に、一人で出て来たのが運の尽きです！」

めぐみんを省いた俺たちはボソボソと呟いた。

「おい、あいつあんなこと言つてるぞ。毎日爆裂魔法撃たなきや死ぬとか駄々こねるから、仕方なくあの城まで連れてつてやつたのにいつの間に作戦になつたんだ」

「…うむ、しかもさらつとこの街随一の魔法使いとか言い張つてるな」「カズマ、お前何で城の中確認しなかつたんだ。そのせいでこんな面倒なことになつてるんだぞ。まあ、面白そудし良いけどな」

「しーつ！そこは黙つてあげなさい！今日は爆裂魔法撃つてないし、後ろに冒険者がいっぱいいるから強気なのよ。今いい所なんだからこのまま見守るのよ！」

俺たちの囁きが聞こえたのかほんのりと顔を赤くするめぐみん。

「爆裂魔法を辞める気は無いのか？これ以上あの迷惑行為をしようと言ふなら、こちらにも考えがあるぞる」

「迷惑なのは私達の方です！あなたがあの城に居座つてはいるせいでまともに仕事も出来ないんです！余裕ぶつていられるのも今のうちです。こちらにはアンデッドのスペシャリストがいるのですから！先生、お願ひします！」

「おい、丸投げするのかよ！」

おつと、思わず突っ込んでしまった。いや、誰でも突っ込みたくないと思う。

「しようがないわね！魔王の幹部だがなんだから知らないけど、あんたのせいでクエストが受けられないのよ！覚悟は良いかしら！」

アクアが片手を前に突き出す。対してデュラハンは自分の首を前に出してアクアを見た。デュラハンなりの相手をマジマジと見る方法なんだろう。

「ほう、プリーストではなくアーケプリーストか。この俺は仮にも魔王軍幹部の一人。こんな所にいる低レベルのアーケプリーストなどに浄化されるほど落ちぶれてはおらんし、アーケプリースト対策は出来ているのだが、ここは一つ、紅魔の娘を苦しませてやろうか！」
「ダクネスお前の出番だ！さつさとめぐみんをお前の後ろに隠せ！」
俺はそうダクネスに言い放つてから剣を取り出してデュラハンに接近する。俊敏だけがこの身体の取り柄だ。

「なつ？ダクネス！ハヤテ！」

デュラハンに近づき剣を振り下ろすのとデュラハンが言葉を放つのは同時だった。

「汝に死の宣告を！お前は一週間後に死ぬだろう!!」

黒い光が直線上に飛んで自分で自分へと飛んで行くがその光に当たることも気にせず剣を振り下ろす。

キン！と高い音が鳴り相手の鎧を少し傷つける。デュラハンはすぐには大剣を構え振り回す。すかさず剣でガードするが後ろに後ずさる。

「貴様なかなか筋が良いな、だが！まだまだ鍛えが足らん！そしてお前は呪いで一週間後に死ぬ！そこの紅魔の娘の愚かな行為がその男を殺してしまうのだ！紅魔の娘よ、その男に掛けられた呪いを解きたくば城に来るが良い！クククククツ、クハハハハハ！」

デュラハンは咲笑しながら街の外にある首の無い馬に乗りそのまま城へと去つて行つた。

「はあ、行つちまつたな」

「おい、どこに行く気だ。何しようって言うんだよ」
デュラハンを取り敢えず撃退？したがその代わりに呪いを掛けられてしまった。カズマとダクネスの隣にいるめぐみんは青い顔でわなわなと震え、杖をギュッと握り直し、一人で街を出て行こうとする。

「おい、どこに行く気だ。何しようって言うんだよ」

「今回の事は私の責任です。ちよつと城まで行つて、あのデュラハン
に直接爆裂魔法をぶち込んでハヤテにかかつた呪いを解かせてきま
す」

怒っているように見えるのは、自分のした行いからなのかそれとも俺が勝手な事をしてしまったからなのか。そんな事よく分からないが、めぐみんに近づく。

「俺も行くぜ」
「自分にかかるた呼吸した
こういつののもRPGの醜陋味
だろうしな」

「なら、お前はベッドに寝てないとな。RPGなら呪いに掛けられた奴はベッドに寝てるつて決まってるだろ。俺も行くよ。めぐみんだけだと雑魚一匹も倒せないだろうしな」

「まつ毛の毛束も、お出番ですね」

づいてきた。

「あの、ハヤテ。本当にすいませんでした。私が軽率な行動をしてしまつたせいで…」

ん
一氣にするなつて。今から城に行くんだぞ？頼りにしてるよ、めぐみ

そう言つてめぐみんの頭を撫でる。少し微笑んでくれたのでこれ

で良いだろう。カズマが号令を掛けた。

「よし、じゃあ城に向かつてしゅぱ……」「セイクリッド・スペルブレイク！」

アクアが俺に向かつて魔法を放つ。

「どうどう？・デユラハン程度の呪いなんて、このアクア様にしたら楽勝に解けるわ！」

「「えつ？」」

せつかく盛り上がっていた、俺たちの気持ちを返せ。と言いたいが、呪いが無くなるのは嬉しかったのでなんとも言えない気持ちになつた。